

多様で連続しているということ

色のバリアフリーをご存じでしょうか。昨今カラーユニバーサルデザインを実現する事業が展開されています。日本工業規格（JIS）が定める安全色の規格では、識別度を上げる意味で赤は少し黄に寄せてあると『色のふしぎ』と不思議な社会 2020年代の色覚原論（川端裕人 2021年）という本に書かれています。そして人間には長い進化の過程で赤と緑の識別が得意な3色型色覚と赤と緑を区別しにくい2色型色覚があり、それぞれに利点があること。そもそも色は主観であり、赤や緑といった色の感覚も人によって異なるもので、最近の研究成果では人の色覚による違いを明確に線引きすることは難しく、ほぼ連続した分布になっていること。つまり色覚は多様かつ連続しており、正常と異常という分け方は合理的ではないこと等々、赤緑色弱の私には納得できる論考でした。

さて、多様性ということは様々なところで強調されるようになりましたが、武蔵野市第六期長期計画にも「誰もが安心して暮らし続けられる 魅力と活力があふれるまち」として「多様性を認め合う支え合いのまちづくり」（基本目標1）などが掲げられています。

多様性ある社会が活力を持つためにはまずは相互の理解や協力、そして適切に必要な支援が届いていること、また当事者の学びや交流の機会などが講じられなければなりません。先の川端裕人氏は「それぞれの色覚は優れてもいなければ劣ってもいない」と言います。誰かを、また何かを排除するのではなく、個々の違いも包摂する社会の在り方が大事なのだと私は思います。

社会福祉法人武蔵野は行政セクターという位置づけをも有し、武蔵野市と連携して様々な事業を進めてまいりましたが、お互いに支えあい、お互いに和して生きる社会を願って活動を進めていきたいと思えます。

令和3年5月 安藤 真洋